

私の人生 思ひ出

八尾政吉

「私の人生 思ひ出」発行について

次男 八尾 春雄

平成28年12月23日、父政吉(まさよし)が92歳で亡くなりました。

家を片付けたところ、70歳の時にしたためた自分史Ⅱ「私の人生 思ひ出」が出版されました。兄から、父が何やら自分のこれまでのことをまとめているようだといわれていたので話が符合します。ところが今度は2年もしないのに兄静雄(しずお)が難病で亡くなりました。

こんな経緯で、父の三周忌の行事も行わないことを弟修三(しゅうぞう)と相談しましたので、父が生きてきた証とでもいうべきこの文章をおおやけにすることで、お世話になった皆さんに偲んでもらえたらと勝手な思いを巡らしています。

遊び事はあまり得意ではないが精一杯生きた父・・・・・・・・・・・・・・・・

子どもの目から見て父のことを少し振り返ってみたいと思います。

酒もたばこも嗜まず、囲碁・将棋はせず、トランプは七並べぐらいでした。まして骨董収集に費やす金もなし。私が気付いた趣味と言えば浪曲と菊づくりというところでしょうか。

神通川原に富山空港が出来た時には、初めて飛行機が来るというので、自転車で農道を二人乗りして見に行ったことがありました。少し寒い時期で、体が震える私に、持っていた日本手拭いで頭からかぶせてくれたりしたことを思い起こします。

家で友人とかくれんぼで遊んでいたら、押し入れから何やら賞状のようなものを発見。八幡製鉄の株券でした。元来博打が嫌いで、儲かるかどうか分からないものを購入した理由を聞くと「八幡製鉄が倒れるときは国が倒れる時だわい」とその安定性に期待を持っていたらしいです。私が博打どころか宝くじもまったくやらないのは父の影響もあります。

菊づくりでは、町の品評会に毎年五点出品し金賞を射止めたこともあるけど、家族全員の名前で出品したものらしく、規定では本来一人一点とのこと。ルール違反はこれぐらいです。私が帰省の折りには農作業用の雨合羽を着てへっちゃらで作業していましたね。

農繁期には、リヤカーで刈り取った生稲を作業場に運び込むのを後ろから押す手伝いをしました。辛いので、三人で示し合わせて押すのを止めるとリヤカーが止まり父が後ろを振り返ります。少しは役に立っているようだと分かりました。でも本人は

「農業は自分の時代で終わり」と考えあまり私たちに農作業は求めませんでした。

農家にとって、農協の重要性を教えてくれた父……………

農家にとって農協がいかに重要な組織であるのかを教えてくれたのも父でした。生産と消費の違いはあっても、私が市民生活協同組合ならコープに就職したのもこうした背景があります。

父のビックリ発言……………

時々ビックリするような発言もあります。「春雄や、皇太子は可哀そうだよ。天皇陛下にしかならん者（もん）なあ、なかなか天皇陛下になられんじや」というのです。現在の上皇陛下が皇太子時代に、父親の昭和天皇在位50年となり、職業選択の自由がないことをこのように表現したもので、制度の本質を喝破していると思います。

拉致被害者が羽田空港に降り立った直後、私も考えるところがあり、韓国籍の親しい小学校時代の友人と35年ぶりに会うというので家に招いたことがあります。挨拶すると「あんたとこのばあちゃんとうよう付き合いたちゃ」というのでびっくり。「思ひ出」の中に出てくるヤミ米の話です。友人の祖母が担ぎ屋グループの元締めであったらしいです。法律違反だから殆ど本人は書いていませんが、そのようなことも試みて農業に取り組んだということですね。全く酒が飲めないのに「俺はドブクロの作り方を知っている」というのもこうしたことと関係があると私はみています。

突然だった兄の死……………

父が亡くなってから二年もたたない内に、東京の兄が病気で亡くなりました。会社を定年退職したならば、富山に戻って一緒に暮らすという選択肢もあったのですが、進学した大学や就職が東京でしたので、恐らく離れられなくなったものと思います。

父の文章には、生活した時代の違いや固有名詞や農業関係の用語で分かりにくいところもありますが、私の理解する範囲で簡単な説明もつけてみました。どうぞ最後までお付き合い下さるようお願い致します。

私の人生を記憶の限りを思い出して綴ってみよう。

私は大正十三年三月十三日、富山県速星村海川原（うみがわら）で農家の次男として生まれました。先祖は八尾町西町江尻家から甚四郎が速星に出て来て農業をしたらしい（旧婦負郡には、婦中町・八尾町・山田村・細入村があり、平成の合併で富山市に編入された）。私の親で六代らしい。現在の日産化学工場（町内で最大の化学工場）が建設されたのが昭和二年。その頃、家は大字速星（はやほし）八四四、八四五番地にあり、現在は他の方の居宅となっている。東向きの茅葺屋根の家で、その前に納屋（なや：農業用の作業場）がありました。旧坪野川が家の後に流れ、笹舟もあつて米を運んだり、鮭も俎上してきたので食べたそうです。

記憶にある時はすでに現在の坪野川が改修されていました。

（1）子どもの頃の近所の風景は……………

現在の給食センター（居宅東側で経営していた弁当屋さん）の上流二十位位の所に旧大字御門（みかど）の旧家、井上さんの自家発電所がありました。落差は二十位、五十位、その近くに村の水車小屋があつて穀物の粉を引く小屋があつたそうです。発電所の水車だけが、永く土提の上に雨ざらしになっているのを見ました。暫くしてから電気が普及して来たので、廃止されました。それ迄は家では石油ランプでした。

家族のおじいさんは忠藏（ちゅうざう）と言いました。大きな人で、地方では草相撲の力士で四股名を“坪の森”と言ひ、この化粧回しは黒地に白字、縁取りは金糸



シニアカーに乗って友人と話をするのが日課だったようです。

でした。おばあさんはよく覚えていませんが、ちよつと背の低い人の様、父滋次郎、甘党、お茶と話が好き、富山の衣料店、反物売りの手伝い、近所に売り歩きました。母は優しい人、長男高重、次男私、三男義則、長女あや子、次女きよ子、五人兄弟の家庭で育てられました。昔、村の小学校は原さんの北隣にあり、私達の頃は、婦中町役場の敷地の場所でした。小学校六年間、皆出席し、近くに県立農学校があるので、家は殆ど小作ですから、今から見れば、貧しい家でしたが、無理して進学し三人共卒業させてもらいました。入学した時は戦争中で学校では、正規の軍事教練があり、私達の入学期から服装は国防色（カーキ色）三ヶ年一着のみで卒業し、修理に修理をしました。他の生徒は二着、三着と新調していました。家計の事を考へての事です。また、三年生の時、修学旅行は関東関西方面でしたが、クラスで三人欠席しました。靴鞆制服小遣い等、経済的に無理であるため行きませんでした。平常三分の一の生徒は革靴で登校していました。兄が戦地に行く面会の写真には私はゴムの短靴をはいて写っています。この様にして、農学校を卒業したのです。

（2）小学生の頃から家業の農業に取り組む……………

小学校五年生の頃から農業の手伝いを行い、株踏み（足で株を二つに切る）鍬と鎌、スコップ、稲の収穫時、曇つて来たり、雨が降るようになると稲を立ててあるのを集めて山に積み上げました（たつぽ）。さらに、粃の筵乾しの出し入れ、稲こき（脱穀）、後先になりましたが六月は田植え、田ころがし（中耕除草機）、そのため学校の宿題はそこそこ、農学校在学中は重い仕事、稲運び仕事も多く大変でした。

（3）父滋次郎の死で状況が激変……………

農学校を卒業した年、九月二十三日に父滋次郎が病気のため五十九才で亡くなりました。当時私は十五才。我が家は大変な事になりました。兄は軍隊、姉達は嫁入りして、家にはいません。残った母と私、弟三人で今迄の農作業をしなければ生活は出来ませんでした。収穫は重労働で、昼間は稲刈り、夕方から生稲をハサ場迄運ぶ、終わったら、夕飯を土足のまま家の庭で筵を敷いて食事。夕食のみ義則が担当。食事後一反歩の稲をハサに掛け終る頃は夜中の十二時です。又翌日同じ様な仕事が続いています。収穫が終るのは、十二月迄でした。雨の日も多くなつて粃を乾かすのに一苦労します。俵に入れて農協へ運ぶのですが、仕上がりが悪いと等級が落ち収入が減ります。もう青春なんか有りません。無我夢中で働きました。田畑も草で荒れ、人目に入るので草を無くする為に命をかけました。三年位でやっと草が少なくなり、馬耕や俵装は村の人や知人に、教えてもらい、やっと人並みに近い

農作業をする事が出来ました。でも収量の面では少ない方で一人前なら反当り七俵八俵あれば大豊作でした。戦争中ですので、米の供出割当が厳しく、必ず完納させられ、足りない分は保有米、飯米用の白米も削って供出した事も有りました。消費者の人は配給制で代用食に麦、大豆、大根の葉、さつまい芋、雑炊等を食べていました。その頃、ヤミ米の買い出しの人が毎日、三、四人来ました。ことわるのに大変。完納した上、残れば自家の飯米も売る事が有り、高く売れました。しかし少量ですが、魚や塩も交換、味噌もその塩で造りました。

(4)軍隊に入隊。富山大空襲で戦争は二度としてはならんと実感……………

昭和十九年十一月三日現役で富山連隊に入隊しました。米の収穫作業を残してきたが、その後の仕事は村の人が手伝いをしてくれました。一期の検閲が終り自分は衛生兵の為、金沢で教育三ヶ月、その後は兵舎に兵器が少なくなっていました。これでは戦争は負けると思いました。兵隊は草鞋を履いて演習をしていました。私は衛生一等兵に進級して新設部隊に配属され、草履は一回も履きませんでした。私の仕事は、アミ上げの革靴、兵隊の足の傷や豆、熱のある兵士の看護です。

八月三日富山大空襲がありました。夜の七・八時頃、米軍機来襲、油を撒布したらしく一時間後位に空襲警報、たくさん軍機が焼夷弾(しょういだん)を投下して空中は花火大会の様に明るく、市内を二、三時間のうちに焼き盡しました。その時、私は富山高校の運動場の防空壕の中で空を見上げ、軍はどうする事も出来ませんでした。夜が明けると、命ある人、傷ついた人たちは、町から南へ南へと逃げだし、死亡した人は次から次へと中庭に並べられました。付近の医者は全員逃げた為、軍医に助けを求めて来ました。私達近くの方は外出が許可され、家を見に行くことが出来ました。母は無事でした。富山から速星迄歩行者が続いていました。その後、部隊は夜行軍で入善(県東部で新潟県境に近い)迄行軍しました。

八月十五日敗戦終戦となり兵器を残して除隊となり、馬に関係した人は馬をつれて(欲しい人)除隊しました。空爆で何千の人が死亡したでしょう。一番たくさん死亡した場所は護国神社の裏の神通川周囲、暑いから皆神通川に逃げ込んだから皆死亡してしまいました。防空壕の中にいた人は全員むし焼き、焼き残ったのは大和(だいわ)百貨店の骨組みだけでした。土蔵や金庫は焼けて扉はだらんと大きな口をあけていました。一面、町は焼け野原となりました。市外のどここの家でも疎開者が居ました。終戦二、三年は特に食料不足となり、富山駅付近には男女浮浪者が多く、駅舎や軒先での野宿で家をなくしたためです。広場に雑炊を売りに来ると黒山に人がたかり、またたく間に売り切れ。駅前には青空ヤミ市が出来、魚、食糧品、衣料

の店が並びました。戦争は二度としてはいけないと思いました。汽車やバスもいつも満員でした。

(5) 除隊して、これからどうして生きていくか考える……………

私が入隊していた一年間、村人は私の田圃を作っていました。除隊して、もし私が農業をしなかったら、今は全部他人の土地となっていたと思います。良い職業ではないけれども農業をしてよかったと思います。除隊後、何日も何日も考えました。日産化学へと思ったりしましたが、学校を卒業して一筋に農業をしたのと、田圃が乾田一町歩も並んでいた為、見捨てることが出来ませんでした。父の時代は小作のみで二五、六反位を作っていました。父はあまり身体が丈夫でなく、村の人に少し譲り、残り二町程を兄と分け合うことになり、兄高重(たかしげ)は家の周り七反を作ると言ったので残りを私が作ることにしました。敗戦となった為に、大地主の田圃が解放され、世に言う農地解放で、一反五百円、八百円位で政府から買い取りました。この話が決まった頃に私は独立の準備をしました。農学校に在学中、軍隊に出征した家庭に勤労奉仕学校から馬耕(ばこう)が毎年行われ、町内の朝日の農家、御門の永井分家へも馬耕の手伝いに行きました。その時、永井のおばあさんに見込まれ、大字小川子(こかご)の小森ヨシエ、おばあさんの孫の話が出て来て、見合もせずに、親達の話で結婚する事になりました。今の本家(兄高重の家)の階下を二つに仕切り、五年間、別世帯で過ごしました。

(6) 今度は水害で苦労を重ねる……………

昭和二十三年七月二十三日朝から大雨になり、午後二時頃に家の周りにみるみる水が増えて、外にあった桶や薪等が流れ出しました。家の庭に、馬鈴薯や小麦等、広げて乾かしていたので片付けようとしたが増水が早く、家の床の上に部屋のタンスや品物を片付ける暇もなく二階に逃げあがり、家がどこまで浸水するか心配でした。外は海のように流れていました。神通川の中州に取り残された状況、いろんな物がたくさん流れて、夕暮れとなり電気が消え、笹舟が一、二隻見回りに来ました。水は四畳位でしょうか。床上一畳あまりに増水、米のタンクも水に浸かりました。妻の実家の小森の親達が翌日見舞いに来てくれ、家の中の整理もしていただきました。水は少しは減ったけれども、井田川の堤防が決壊したので、水は完全には減りませんでした。決壊した場所は、宮川の田屋。次から次へと堤防が決壊、笹倉の人は井田川を見に来ましたが堤防上より六十cm下迄、満水状態で驚いて帰ったそうです。日産化学の社宅は平屋の為、天井を破り屋根を破って、屋根で一夜を明かした人

もいたそうです。速星地区は激流、馬小屋が一軒倒壊しました。死者はなかったようです。稲は泥水で埋まり、減収、脱穀の時はきたなくて、大変でした。翌年、田圃に土が入って耕すのに、また苦勞しました。家の中も泥水が入った為、ゴミやら土やら臭く、元に戻るのに労力が大変。豊も全部だめになりました。水害はこの位で。

(7) 自分の家を持つことを決意、借金の返済に迫られる……………

その後、良かったのか悪かったのか、人から酪農をすすめられ八万円で立派な乳牛を手に入れましたが、出産二ヶ月前に手放す事になり、農業の重労働、高級な飼料等が原因で買った人に買い戻してもらう事にしました。価格十三万円。この金を元金にして家を建てる決心をしました。

長男静雄は小川子で誕生しましたが、その翌年三月工事着工。速星から南の熊野方面に伸びる県道から建設予定地までは少し離れていて、交差点の所から道も狭いのでトラックで地盛をしました。妻の遠縁にあたる婦中興業竹内社長に家を建てる事を依頼しました。八月には落成。でも落成と言っても屋根は板葺(フキ板)、周りは雨戸だけ、天井無し、荒壁、部屋を障子戸で囲んだ価格六十万円です。本家から大工賃の援助をもらい、残りの資金は、小森家より利子無しで借金をしました。三年後には屋根のフキ板が風で飛んだり腐ったりして直しましたが、五年には農協で借金して、大屋根だけ瓦葺にしました。

次男春雄は家を建てた翌年この家で、昭和二十八年五月七日に誕生。三男修三は昭和三十年三月十四日、富山市民病院五福分院で誕生。ヨシエは女の子を願っていたが思うように神仏はしてくれませんでした。でも一生懸命働いて、年がいつてから楽な暮らしをと、三人の子どもを育てあげました。

数年後、借金で低い屋根の部分の瓦葺をし、ハサギの丸田で藁葺の作業場でしたので四十万円で新築し、数年後、瓦と今の様に仕上げました。その頃、村では一番大きな作業場でした。楽な仕事をする為に、もし子どもが分家する時に資金がなくて家を建てる事が出来なければ、作業場を住宅にと丈の高い作業場としました。これからのことを考えてのことでした。又、ちよつと低い建物は、昔は年三、四回位の強い台風によって、本家の家が舟に乗ったようにゆれたから高くしたそうです。室戸台風、ジエン台風、伊勢湾台風クラスの台風は、最近はあまり来ませんが、平成四年の六号台風は強かったです。昔のことを思って材木も少し太い物に、屋根のところには、スクイという造作でまがった太い木で造ってあります。平成四年十一月現在の住宅を大修理しました。二十年に一度は、家を手入れた方が良いです。手入れが悪いと長持ちしません。「基礎には近所にならないようなことがしてあります。米松のク

イ、長さ四尺物、住宅作業場合わせて百本位打ち込んだ。直径五寸位コンクリート（布コンクリ）の中五寸鉄筋も一応十分に使ってあります。普通コンクリートは四寸、田圃のネガ土からコンクリートとで仕上げてあります。こんな基礎はうちだけでしよう。クイ打ちは、大きな発動機で打ってあるから絶対に下がらない。下がると必ず周りのセメントが割れる。戸が開かなくなる。基礎と屋根の手入れさえしてあれば火の用心は元より、長持ちするはずである」と信じている。こうした経験を生かし、結婚して「近くに新居を建てたい」と希望した修三の家も頑丈に造りたいと考え、材木も太い物で建てました。

（８）耕作面積の拡大と営農を目標に掲げる……………

農業をしていますが、いつも何かを考えていました。それは本家の通り西に保井家の田圃五軒分（一反）見崎さんと私の田圃、今は富山西高校の敷地になっている田圃と交換したのが、財産を増す原因となりました。その売却代金と他の土地を含む代金を合算し、数年かけて、五反買いました。また、これまでの、農協や小森さんからの借金も返済することができたので今は借金はありません。速星地区は市街化区域の為に宅地に売る事ができたことも幸いでした。いつか金になる土地のことを常に頭の中に入れて、農業をしています。今は農業では苦しい時代です。子どもが小学校在学中、農業では財産を残すことができないと思い、勉強させておけば、何とかなると、ヨシエと相談して学費の仕送りに一生懸命働きました。その甲斐あつてか息子達の姿、孫達を見て、満足しています。

今迄の米作で一番収量の多い時は、品種アキヒカリ、反収六十キロ一俵で十二俵の田圃が三反最高でした。こんな収量の年が三年程続きました。良く手入れもし、経験を積んだたまものと感謝しています。

（９）ヨシエとの結婚と病気、そして別れ……………

昭和二十三年四月十日 ヨシエ（二十才）と結婚しました。結婚式まで会ったこともない女性との結婚は当時はよくありました。花嫁修業は和裁のみ、他人の着物も仕立てました。家に来てから直ぐ、富山市のシンガー洋裁学院へ一年間通い、自分、子ども、私の仕立てもするようになりました。衣料店の仕事で、蒲団、座蒲団を造るのに働きに行き、綿を入れる事も習ってきたと喜んでいました。それでミシンを買ってやりました。その他、毛糸手編みや機械編みも習い、編み機も買ってやりました。年がいつてから、民謡を習いたいと言うので、夜ですが速星公民館で週一回、人の前で歌えるようになり、敬老会の慰安会で合唱もし、一人でも歌ったそのテープが家

に残っています。また、仕事として、安田生命外交員、道正昆布店、婦中興業等、農業の仕事を手伝いながら働きに出ました。田植えは人並み。秋にはコンバインの袋も一人で道の所まで持ち上げて運んでくれました。

昭和五十八年一月、顔色が悪く友人から注意され安村内科医院の診察を受けたところ、胃に異状が見つかり、富山古屋病院で胃カメラで手術が必要とされ、一月二十日過ぎに手術、五分の四を取りました。綺麗に取ったとのことでしたが、その後腎臓に転移しているのが分かりました。あと何年生きられるかと医師に相談したところ、「五年余り」との回答で私はがっくりしました。ベットの横で三ヶ月看護しました。「蒲団が重い」と訴え、食事も流動食、幼児同様、気苦労は大変でした。退院してから一日おきに通院。この時、軽四トラック新車を買ひ、病院通いと農事に使用することにした。昔、普通免許を取っていたので助かりました。この頃から、不二越病院で痔の治療、市民病院、富山医科薬科大附属病院の眼科、山崎歯科等に通いました。いろんな病気をしたので大変でした。

古屋先生からは六十三年六月一日もう駄目らしいと宣告され、死亡する一ヶ月前に再入院していたのですが、その晩は眠れませんでした。可愛そうでした。これから人生を楽しむ時期なのに、人生とは、こんなものかと思いました。六月二十日の朝六時、私、小森一族、兄弟に見守られ息を引き取りました。葬儀は盛大に家の広さに合わせ、たくさん菊で飾り、通夜に大勢の方がお参りに来られました。葬儀も同様、坊さんは四人、田屋妙宗寺様二人、地元善通寺様一人、妙宗寺のお連れの方一人でした。それ以後はずっと一人生活。もう一つ頑張らなければと思います。

修三の結婚の事、探し始めて六年目、ご縁があつて、音川の山藤順子さんと結婚することが出来ました。平成四年修三の家が出来上がり、東京から富山に来る事ができました。結婚式の私の挨拶の言葉の中に妻が死亡した時の事、今日この会場に出席してヨシエの写真を皆に見せたのは、山善の上司に富山に戻るようお願いする意味での発言だったのです。自分なりに考え出した言葉でした。

(10)借金はいくまで借金、財産ではないというのが私の持論……………

財産のことについて。借金も財産の一部であるとも世の中の人がありますが、借金はいくまで借金。財産でない私は思います。父が死亡してから若年ではあるけれど、家の様子が少しづつ分かってきました。「農協、肥料店に借金が残っていました。農協の借金は昭和初期に、家を新築した時の分、貳阡円余り、農業での返済は利子に追われ元金はいくまで減らない。」肥料商は有機質肥料、大豆粕、ニシン粕、カ

二粕、高価な肥料です。父はあまり達者でなく、米作りは上手ではない。田圃に草がたくさん生え苗の生育悪く、病気になっても農薬もなく、枯れ、イモチ病等、収量反収二、三俵しかない。質も悪く、地主に納入できない年もあつて、肥料を施しても米は取れません。自分たちの食べる米は二級品(二番米)か屑米を製粉してだんご餅をよく食べさせられました。甘藷も米がわりにしたことがあります。お金が入らないから借金になる。こんな事を父がしていました。私が事態を把握してから、どうかして借金を返済しようと思いました。ところが、兄が給料取りで洋服にお金をかけたり、軍隊に入隊してからは、軍人には小遣いしかないからといって、借金返済には殆ど協力してもらえませんでした。

私は「こんなことで負けるものか」と考え、安い肥料で、田圃を荒らさないよう努力し続けてきました。70歳に達した今、振り返ると、私には一度も青春がなく、旅行や遊ぶことが一度もなく、働き続けた毎日であつたように思う。少しでも米を多く作ることに尽力してきました。少しずつ、よい農薬もできて収量も増えてきました。父が死亡してから肥料商が借金の請求にやってくる、母と私の前で「半分位で整理して下さい」と債務整理を依頼してきました。ついに母と相談して、馬を一匹育てていたので売る事にし返済に充てました。生活も節約して二、三年後に全額返済にこぎつけました。農協の分も少しずつ返済。私が軍隊に入隊する迄、殆ど返済するところまでこぎつけました。面白いことに、戦後の経済はインフレーションで物価が急激に上がり、米価もヤミ米でも収入を得たことも影響しているように思います。反対に、家にお金があつたなら、国は戦費調達のために戦時公債を大々的に売り出していたが、これに協力した家では戦後は紙切れになつてしまった家も多いと聞いています。

若くして父を失い、貧しさの故に借金で苦しんだ私の人生ではありましたが、戦後の農地解放で農地を入手し、次男にも平等に相続権を与える民法改正が私の生活基盤を支える柱になっていることは感謝しています。また、詳しく書くわけには行きませんが、懇意にしていた在日韓国人の皆さんにも言葉にできない応援をもらい世話になつたことは喜んでいます。この文の後編、また綴つてみたい。

(*)で父の文章は終わっています。何を書きたかつたのか、そんなことを考えながら父を偲んでいます)

通夜式での遺族代表挨拶

八尾 春雄



年末でしたが、たくさんの方々が
駆けつけて下さり感謝しています。

本日は年末のご多用のところ、また昼のお仕事やいろいろな用事でお疲れにもかかわらず、このように多数の方においでいただきありがとうございます。本来であれば長男静雄からご挨拶すべきところ、健康がすぐれませんので、次男の私からご挨拶を申し上げます。

私は、父が高齢で一人暮らしをしておりましたので、週に一度は用がなくても電話をすることを心がけておりました。この九月ころから電話がかかりにくくなったなと感じておりました、先日は30回呼び出しても電話に出ない事態になりました。さすがに心配を致しまして、近所に住む弟に電話すると「おそらく電話口までたどり着けないのではないか」との返事でした。そのため10月に入ってから様子を見に来ておったのですが、今度は弟から電話があり「体が痛い、と父ちゃんが訴えるのが尋常でない。救急車を呼び富山市民病院に緊急入院させた」というのです。

医師が診断をすると「家族に集まってもらいたい」とのことでした。いよいよ来るべき時が来たか、と思いました。医師はモニターで、集まった家族に説明を行い、よくわかる説明でした。詳細はこの場でお伝え出来ませんが、要するに、体の機能というものが本来の役割を果たしにくくなっているとのことでした。そのため私たちは父がこれ以上苦しまないように、痛がらないようにだけしてもらいたいとお願ひしていたのですが、日本の医療は進んでいますね、その53日後に息を引き取りました。

家族の誰も最期を看取ったわけではありませんが、穏やかに最期を迎えることが

できてよかったと感じています。むしろ92年間、いろいろな方に助けていただきながら、毎日を頑張ってきた父にご苦労さんでしたと声をかけたい気持ちがございます。

今日は地域と一緒に農業をしておられる皆様にも来ていただいておりますが、父はずうつと農業に取り組んできました。10歳のころから牛を操り、近くの婦負農学校を卒業して、いよいよ家業の農業に力を入れてきました。戦前の我が国は、半ば封建的な大土地所有制度の下で、父は小作人の次男坊として誕生しましたから、当時の世の中のままであれば何もないということになります。けれども、戦後、農地解放があり、農地を手に入れ、自作農として再出発することができて、今の私たち家族の生活が成り立っています。

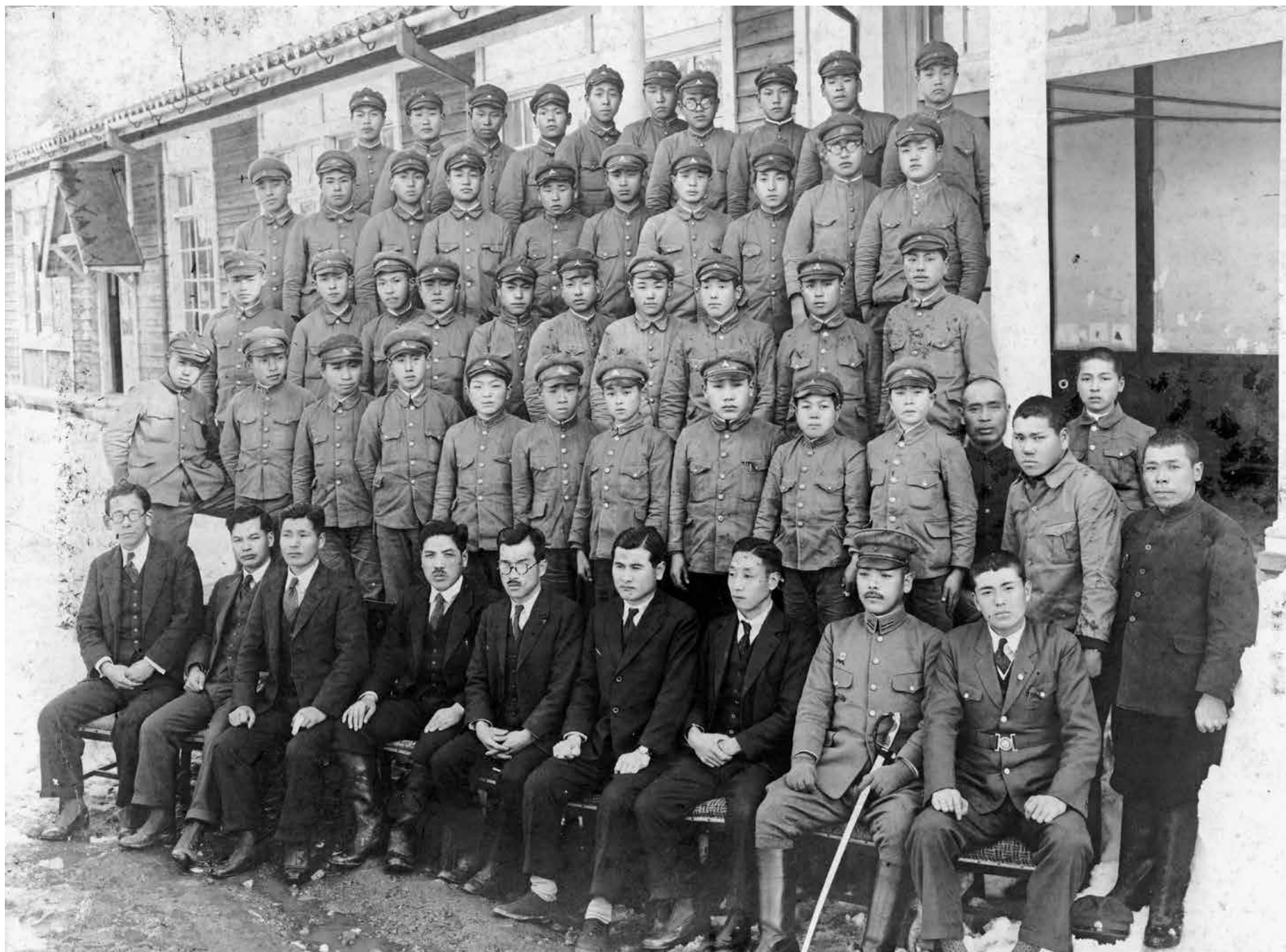
兄静雄は東京で、次男の私は奈良で、それぞれ新しい生活を始めております。弟修三は生家の近くに住み、何かと父を助けていることは兄弟としてありがたいことだと感謝しています。特に、連れ合いの順子さんですが、父をだいぶん大事にしてくれて喜んでいます。体調がよくないときには父の世話をし、そうそう田植えの話もしておかなくてはいいですね。最近では田植えも機械でできる時代になったのですが、真ん中は機械で植えても端のあたりはどうしても手で植えなければ作業が終わりません。そんな時に順子さんから声がかかり「お父さん、こつち植えられ、私こつち植えつちや」と仕切られたことを楽しそうに話してくれました。二人の男児がおります。優太（ゆうた）と啓太（けいた）であります。親の背中を見てまっすぐに育っております。して私も将来を大変楽しみにしています。

ここで、本日来ていただいた地域の皆様、友人の皆様、親戚の皆様にお願いがございます。弟とその家族については、是非、仲良くしてやって欲しいと思うのでございます。いろいろなことで向き会わなければならない課題があつた時に、弟の意見と一緒にであれば問題は起きませんが、意見が違ふ時があるかと思ひます。そんな時には、弟は皆様方のご意見をきちんと受け止めるだろうと思ひます。そのような場合には、皆様方の側でも弟の意見をよく聞いてやって欲しいのでございます。そしてごく稀に、人として誤つた行動をとる場合があるかもしれません。そんな時には厳しく叱つていただいて、よき方向に導いてやって欲しいと思うのです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日は誠にありがとうございます。

平成28年12月26日

於 シティーホール掛尾



昭和 14 年 3 月、婦負農学校卒業記念 後列 2 列目右から 2 人目が八尾政吉

私の人生 思ひ出

著 者 八尾 政吉

編修・発行 八尾 春雄

〒六三五―〇八三一 奈良県北葛城郡広陵町

馬見北五丁目 10―17

☎ 〇七四五―六〇―〇九七二

発行・印刷所 笹田印刷所

二〇二〇年（令和二年）二月 発行